

当院における経口抗血栓療法に関連した慢性硬膜下血腫の検討

志藤里香¹ 神澤孝夫² 富尾亮介¹ 赤路和則¹ 谷崎義生¹ 木村浩晃⁴ 美原盤⁴

Antithrombotic therapy during the surgical management of chronic subdural hematoma in our hospital

1 脳血管研究所美原記念病院脳神経外科

2 脳血管研究所美原記念病院脳卒中科

3 脳血管研究所美原記念病院神経内科

【背景】人口の高齢化に伴い心房細動患者、また、慢性硬膜下血腫患者は増加しており、抗血栓療法中の慢性硬膜下血腫患者の症例も年々増加している。慢性硬膜下血腫自体の多く手術手技は簡易ながら、抗血栓療法中の周術期の出血性合併症、硬膜下血腫の再発リスク、休薬の是非、時期の問題、INR コントロール、脳梗塞発症予防のための周術期のマネジメントは重要であり、実態は不明な点が多い。今回われわれは、自験例を対象に抗血栓療法中における慢性硬膜下血腫の臨床的特徴について検討した。【対象】2012年1月～2016年12月に当院で入院加療を行った248名の患者を対象に手術の有無、経口抗血栓療法の内容を検討した。平均年齢は78歳、抗血栓療法中の症例は58例であった。心房細動は13例(5.2%)にみられ、このうちワーファリンまたはDOACの経口抗凝固療中の症例は10例、抗血小板剤の症例は27例、抗凝固療法に加え、抗血小板剤内服中の症例は7例、DAPT中の症例は8例、そのほか(イコサペント酸エチルまたはリマプロストアルファデクス)の内服中は5例であった。周術期中に中止した症例は57例で、術前中止期間は平均3.76日、17名で術後再開されており術後再開までの平均日数は27日であった。また抗血栓療法中の患者の術前の平均APTT値は33.14sec,平均PT-INR値1.43,平均血小板数21.3万であった。抗血栓療法施行中の患者は発症前mRSが平均0.5に対し退院時のmRSは平均2であった。また手術せずに軽快し退院した症例は13例、このうち抗血栓療法を中止していた症例は9例となった。再発例は16例にみられ、死亡例は1例でワーファリン使用症例であった。【結論】高齢者の転倒は多く抗血栓療法の中でも抗血小板剤内服症例に慢性硬膜下血腫の合併例が数多くみられた。高齢者の脳梗塞の病態に鑑みて不用意な抗血小板療法は慎むべきと考えられた。